

日本語の自他交替と接辞

-ar-の関わる自他交替

田川 拓海 (筑波大学大学院)

1. はじめに

- (1) 目的: 日本語における-ar-という接辞が関わる自他交替現象について統語論的観点から分析し、その特徴を明らかにする。
- (2) a. 太郎が壁に絵をかけた。
b. 壁に (*太郎に) 絵がかかった。
- (3) a. 太郎が花子を見つけた。
b. 花子が (太郎に) 見つかった。
- (4) a. 太郎が花子に英語を教えた。
b. 花子が (太郎に) 英語を教わった。

典型的であると考えられる自他交替のパラダイムとは違った振る舞いを見せる。

- ・能動態であるにも関わらず二句動作主を許す ((3b), (4b))。
- ・複他動詞と対応する他動詞文を形成する ((4b))。

-ar-による自動詞化は、語彙意味論の観点から見ると英語の自他交替には見られないパターンである (影山(2000, 2001))。

語彙意味論的観点からの詳細な研究: 松本(2000a), (2000b), 今泉(2001), 影山(2002)

- (5) 本発表の主張: 次の二点を仮定することによって、これら-ar-が関わる自他交替現象が簡潔かつ統一的に説明することができる。

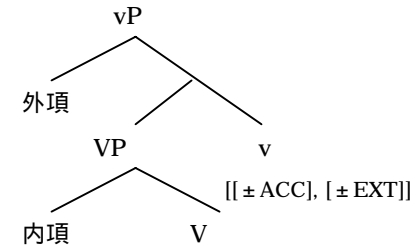
- a. 日本語において主要部"v(Little v)"の位置は自他交替に関わる接辞によって占められている。
- b. 日本語において存在動詞"ある"は自動詞・他動詞両方の構造を形成するという統語的二面性を持ち、それはテアル構文や受動文などの関連構文にも反映されている。自動詞化辞-ar-もその統語的二面性を持っている。

(2)~(4)に見られる複雑なパラダイムは、日本語の自他交替が持つ統語的特性と、"-ar-"という要素の形態的・統語的特性からの自然な帰結である。

2. 前提

2.1. 外項とvについて

- (6) 動詞句の構造



- (7) "v"の特性について

- a. 非対格動詞のような場合にもvという範疇は存在し、その違いは素性の違いによって捉えられると考える¹。
- b. 外項の有無と対格の有無という特徴は切り離して考える (Harley(1995), Arad(1999), 長谷川(2002)など)²。
- vの素性: [[± ACC], [± EXT]]

¹ vという範疇が構造上常に必要であることについての議論はCollins(1997)を参照。

² 特にHarley(1995)では英語においてもBurzioの一般化が成り立たないことが指摘されている。

2.2. 自他交替に関わる接辞と v

2.2.1. 奥津(1967): 自他交替と接辞

- (8) a. 自動詞から他動詞への転化: 他動化 (transitivisation)
 b. 他動詞から自動詞への転化: 自動化 (intransitivisation)
 c. 或る共通要素から自動詞 / 他動詞への転化: 両極化 (polarization)
 (奥津(1967): 51)
- (9) 奥津(1967)の特徴 (本稿との関連で重要な点)
 a. 他動化辞-as-や自動化辞-ar-などの接辞が文の他動性を決定する。
 b. それらの接辞が項をとる述語として機能している。
 c. 自他交替を統語論で扱う。

2.2.2. 西山(2000): 接辞の統語的位置・機能

- (10) ヤコブセンの一般化
 日本語の自他交替の接尾辞で、[s]が現れた場合はその動詞は他動詞で、[r]が現れた場合はその動詞は自動詞である。
 (西山(2000): 146)

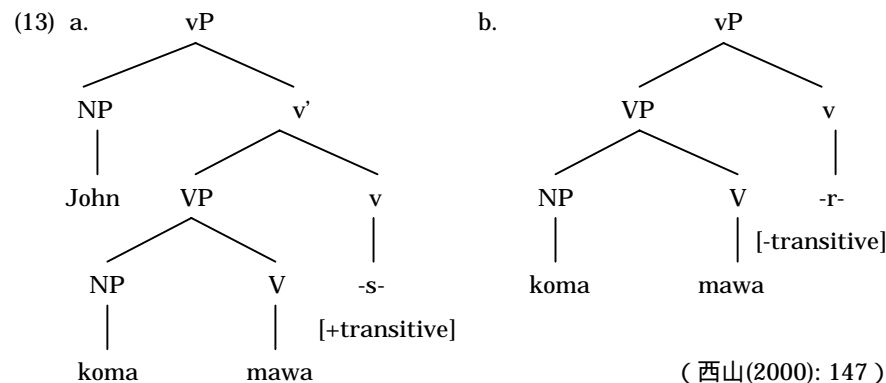
(11) trans/intrans

a. -s-/r-	mawa-s/mawa-r	回す / 回る
b. -as/-	koor-as/koor	凍らす / 凍る
c. -as/-e-	har-as/har-e	腫らす / 腫れる
d. -as/-i-	nob-as/nob-i	伸ばす / 伸びる
e. -os/-i-	ot-os/ot-i	落とす / 落ちる
f. -se/-	abi-se/abi	浴びせる / 浴びる
g. -as/-ar-	korog-as/korog-ar	転がす / 転がる
h. -s/-re-	kowa-s/kowa-re	壊す / 壊れる
i. -s/-ri-	ta-s/ta-ri	足す / 足りる

j. -se-/r-	no-se/no-r	乗せる / 乗る
k. -e/-ar-	ag-e/ag-ar	上げる / 上がる
l. - /-ar-	tog/tog-ar	とぐ / とがる
m. -e/-or-	kom-e/kom-or	こめる / こもる
n. -e/-are-	wak-e/wak-are	分ける / 分かれる
o. - /-e-	muk/muk-e	剥く / 剥ける
p. -e/-	muk-e/muk	向ける / 向く

(西山(2000): 146)

- (12) a. ジョンがこまを回す。
 b. こまが回る。

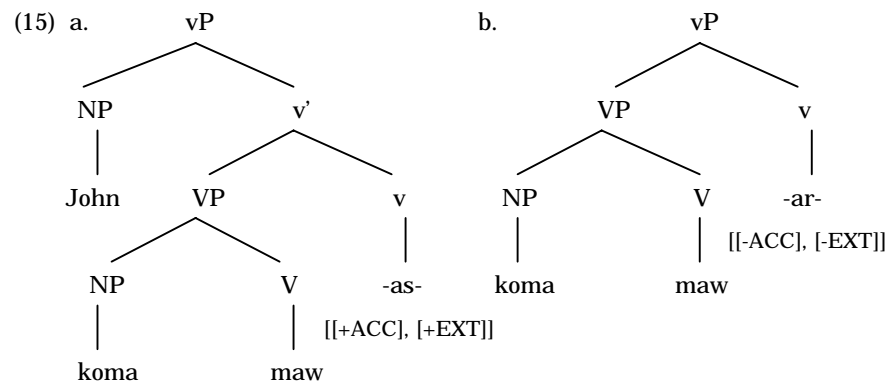


- (14) この分析は西山も述べている通り、奥津(1967)の統語的分析の復活である。
 a. 他動化辞-as-や自動化辞-ar-などの接辞が文の他動性を決定している。
 b. それらの接辞が項をとる述語として機能している ((13a)において外項はvの主要部/s/が導入する項)。
 c. 自他交替を統語論で扱っている。

このような考え方に対する反論として、vの主要部を占める要素として接辞を捉えることはできないのではないかというものがある。

しかし、Kitagawa and Fujii(1999), 影山(2000, 2001)においてこの全く反対の機能を持つように見える形態素-eに共通する特徴を記述する試みがなされている。確かに問題はあるものの、西山が述べている通り、「多様な他動性形態素の異形態が、全く対等な扱いを受け、それぞれの動詞にリストされているとすれば、(10)のヤコブセンの一般化は全くの偶然となってしまう(西山(2000): 149)。」

日本語の自他の対応において接辞が重要な役割を担っているのは確かであり³、本稿ではそこに積極的に何らかの規則性を求めていくという奥津(1967)や西山(2000)の姿勢を踏襲する⁴。



³ 例えば、自他交替を語彙概念構造(Lexical conceptual structure)のレベルで分析する影山(2000, 2001)では、接辞ごとに違った意味構造の変化が起こっていると主張されている。

⁴ すでに、長谷川(1999)においても西山(2000)とほぼ同様の主張がなされているが、ここでは説明の便宜上、より詳細な説明を行っている西山(2000)を紹介することとした。

2.2.3. 竹沢(2000): 「アル」の統語的特徴

-ar-という形態を持つ特徴を捉えるために、竹沢(2000)に着目する。

(16) 「ある」の所有用法は外項を持つ他動詞構造をなし、存在用法は自動詞構造を持つ。この統語的二面性は、テアル構文や受動文など「ある」が関連する諸構文にも引き継がれている。

(17) a. 存在用法：机の上にお金がある。：自動詞構造
b. 所有用法：太郎に貯金がある。：他動詞構造

(18) a. ?*机の上がお金がある(こと)
b. 太郎が貯金がある(こと)

(17, 18a): 場所の二が後置詞Pなので、格マーカーと交替できない。

(17, 18b): 二はある種の格マーカーであり、ガと交替可能。

「ある」の所有用法と存在用法というのは意味的に区別されるだけではなく、統語的にも外項を持つ他動詞が、自動詞かという二面性を示す⁵。

(19) a. 太郎が駐車場に車を止めた。
b. 太郎が駐車場に車を止めてある。：他動詞構造
c. 駐車場に車が止めてある。：自動詞構造

(19b): コントロール構造を持つ他動詞型

(19c): 外項が抑制(suppress)され、対格が吸収(absorb)された一種の受動構文とし

⁵ 「ある」の所有用法と存在用法が統語的にも区別されるということに関してはKuno(1973), 柴谷(1978), 岸本(2002)も参照。

て分析される自動詞型

- (20) a. 警察がその重要書類を押収した。
b. その重要書類が（警察に（よって））押収された。：自動詞構造
c. 太郎が警察にその重要書類を押収された。：他動詞構造

自動化辞-ar-も外項を持つ他動詞構造と外項を持たない自動詞構造を形成する場合があります、その違いが複雑な自他交替のパラダイムを形成するのではないか。

- (21) a. -ar-: [[-ACC], [-EXT]]
b. -ar-: [[+ACC], [+EXT]]

3. 自動化辞-ar-の関わる自他交替現象: 観察

- (22) 「閉まる」タイプ
a. 太郎がドアを閉めた。
b. ドアが（*太郎に）閉まった。
・自動詞と他動詞の交替。
・動作主二句は生起不可能。
・「植える／植わる」、「決める／決まる」、「儲ける／儲かる」など

- (23) 「見つかる」タイプ
a. 太郎が花子を見つけた。
b. 花子が（太郎に）見つかった。
・自動詞と他動詞の交替。
・動作主二句が生起可能。
・「捕まえる／捕まる」

- (24) 「伝わる」タイプ
a. 教授が学生に試験の結果を伝えた。
b. 試験の結果が（教授*に／から）学生に伝わった。
・他動詞と複他動詞の交替。
・動作主二句は生起不可能。
・複他動詞文のヲ格句が他動詞文のガ格句と対応。
・「渡す／渡る」、「掛ける／掛かる」

- (25) 「教わる」タイプ
a. 太郎が花子に英語を教えた。
b. 花子が（太郎に／から）英語を教わった。
・他動詞と複他動詞の交替。
・動作主二句が生起可能。
・複他動詞文の二句が他動詞文のガ格句と対応。
・「預ける／預かる」⁶、「ことづける／ことづかる」、「授ける／授かる」

4. 分析

4.1. 複他動詞／他動詞ペア

- (26) a. 教授が学生に試験の結果を伝えた。
b. 試験の結果が（教授*に／から）学生に伝わった。
(27) a. 太郎が花子に英語を教えた。
b. 花子が（太郎に／から）英語を教わった。

⁶ 「預かる」が形成する文に動作主二句が生起可能かどうかは話者によって揺れがあるようである。しかし、例えば奥津(1967)では「銀行が預金者に金を預かる」という例が挙げられており、許容する話者も存在すると考えられる。

(28) 複他動詞と自動詞型の-ar-が結びつくことによって、「伝わる」タイプ((26b))
が、他動詞型の-ar-が結びつくことによって「教わる」タイプ((27b))が派生
される。

二句名詞句の意味役割について

(29) 「教わる」類の他動詞で共通しているのは、目的語で表された事物が主語の
指示物に向けられて移動し、主語がその影響を受けてある主の変化を被る、と
いう点である。それに対する「教える」類も、主としてヲ格目的語で表された
事物を二格目的語の指示物に移動させることにより、二格目的語がその影響を
受けてある種の変化を被ることを表す。 (松本(2000a): 82)

(26a)の「学生」:[場所]

(27a, b)の「花子」:[被影響者]⁷ (affectee)

[被影響者]: 事象 (event) から受動的に影響を被る個体。

(30) a. 太郎がロッカーに荷物を預けた。

b. *ロッカーが荷物を預かった。

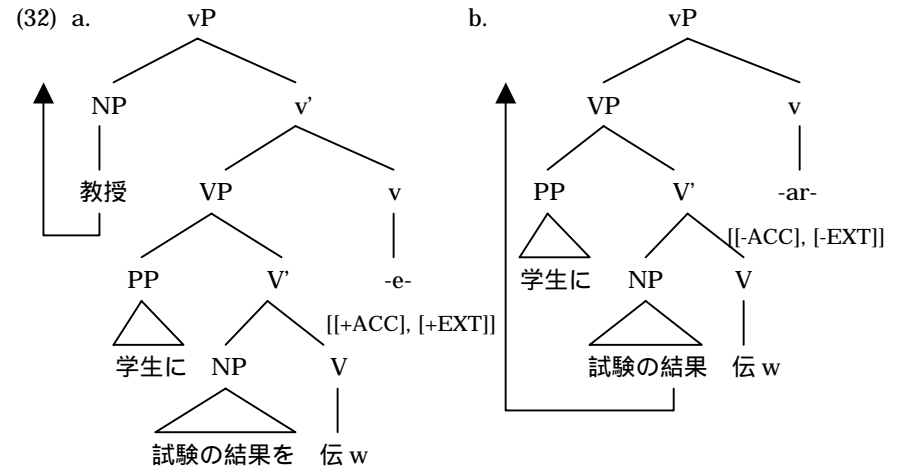
(31) 仮定

a. [着点]は後置詞句 (PP) として、[被影響者]は名詞句 (NP) として具現す
る (加賀(2001))。

b. 二句は[対象]句より高い位置にある (Takano(1998), 竹沢(2000))。

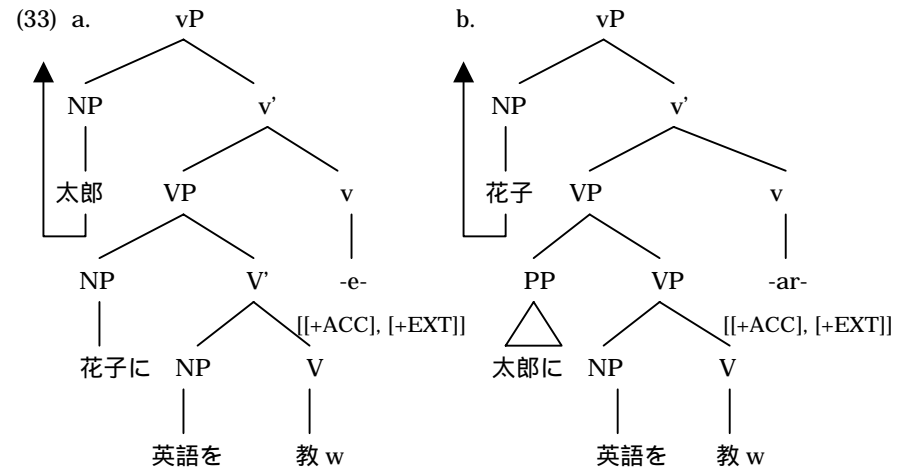
⁷ この要素が「被影響者」あるいは「経験者」と呼ばれるような要素であることに関しては、Matsuoka(2003), 松本(2000a), (2000b), 今泉(2001)を参照。

「伝わる」タイプ((26a, b))の構造



- ・外項が投射されず、対格が現われなくなる典型的な自他交替の例である。
- ・ここでは、自動詞型の-ar-: [[-ACC], [-EXT]]が現われている。

「教わる」タイプ((27a, b))の構造



- ・他動詞型の-ar-: [[+ACC], [+EXT]]が現われている。
- ・ここでの-ar-は外項に[被影響者]をとっている。これは、間接受動文の「(r)are」が「経験者」などと呼ばれる要素を外項としてとることと並行的である。

二句動作主(33b)の「太郎に」の性質: PPで具現し、VPに付加。

「自分」の先行詞になれない。

- (34) a. 健太_iが涼子_jに自分_{i/j}の部屋で殺された。
 b. 健太_iが涼子_jに自分_{i/j}の部屋で突き飛ばされた。 (石田(2003): 87)
- (35) a. 花子_iが太郎_jに自分_{i/j}の部屋で英語を教わった。
 b. 太郎_iは王様_jに自分_{i/j}の手で剣を授かった。

数量詞と関係を持つことができない。

- (36) a. *健太が友人に3人殺された。
 b. *健太が若い女性に3人階段から突き落とされた。 (石田(2003): 83)
- (37) a. *太郎が先生に3人受験の必勝法を教わった。
 b. *太郎は村の長老に3人武器を授かった。

「自分」の先行詞となれないことはその要素が主語ではないことを、隣接した遊離数量詞と関係を持ってないことはその範疇がPPであることを示している⁸。

4.2. 他動詞 / 自動詞ペア

- (38) a. 太郎がドアを閉めた。
 b. ドアが(*太郎に)閉まった。

⁸ 他にも「自分」の束縛についての詳細は中村(1996)を、遊離数量詞についての詳細はMiyagawa(1989), 西垣内・石居(2003)などを参照されたい。

- (39) a. 太郎が花子を見つけた。
 b. 花子が(太郎に)見つかった。

(40) 他動詞と自動詞型の-ar-が結びつくことによって、「閉まる」タイプ(38b)が、他動詞型の-ar-が結びつくことによって「見つかる」タイプ(39b)が派生される。

「見つかる」タイプの主語(39b)の「花子」も[被影響者]である。

動作主二句が具現した場合、「見つかる」のガ格句は人間でなくてはならない。

- (41) a. 健がボールを見つけた。
 b. ボールが見つかった。
 c. *ボールが健に見つかった。
 (cf. 花子が太郎に見つかった。) (今泉(2001): 200)

動作主二句が具現すると、主語の意に反してという被害の解釈が生じる(杉本(1991))

- (42) a. 遭難した男性が見つかった。
 b. #遭難した男性が捜索隊に見つかった。

(42b): 文法的には非文ではないが、状況的に奇妙であることを示す。なぜかという、捜索隊によって発見されたことが「遭難した男性」の意に反するという意味になってしまうから。

(社長を探さなければならないのだがなかなか見つからない、という状況で)

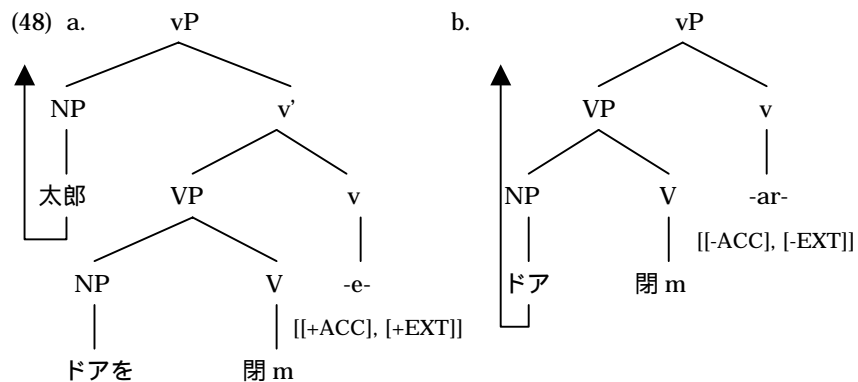
- (43) a. 社長がやっと捕まった。
 b. #社長がやっと社員に捕まった。

(43b): このような場合普通は「社長」は意図的に逃げ回っているわけではなく、たまたま捕まらなかったのであり、(43b)では「社長」がその意に反して捕まったという含意が生じてしまい、状況にそぐわない。

「見つかる」タイプはある一定のヲ格句をとることができる。

- (44) a. 健が先生に 隠し持っていたタバコ/カンニング/つまみ食い を見つかった。
(今泉(2001): 202)
- b. 太郎が警官に ??のぞきの現場を/?二回目の万引きを 捕まった。
- (45) a. *ドアが開きかけを閉まった。
b. *太郎が破産寸前を儲かった。
- (46) a. 健が先生にタバコを吸っているところを見つかった。
b. 太郎が警官に万引きしているところを捕まった。
- (47) a. *ドアがゆっくり開いていたところを閉まった。
b. *太郎が迷っているところを代表者に決まってしまった。

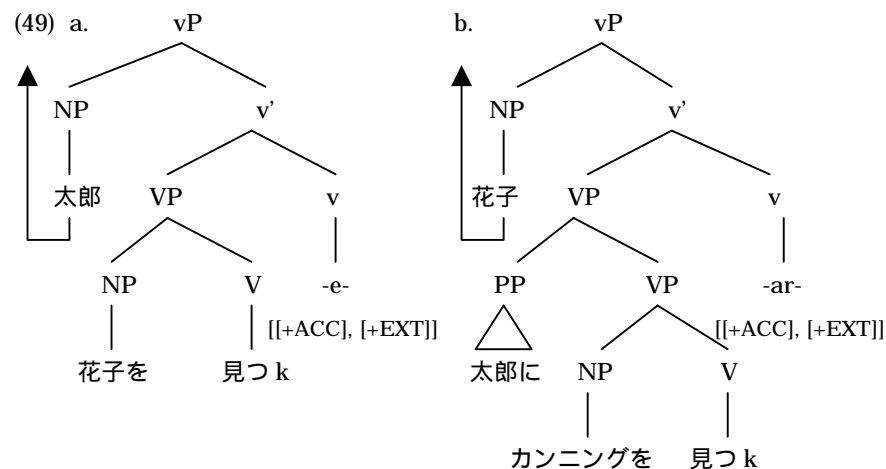
「閉まる」((38a, b))タイプの構造



・「伝わる」タイプと同じ、典型的な自他交替の例。

・自動詞型の-ar-: [[-ACC], [-EXT]]が現われている。

「見つかる」タイプ ((39a, b))の構造



・他動詞型の-ar-: [[+ACC], [+EXT]]が現われている。
・外項に[被影響者]をとり、対格を付与することができる。

動作主二句の性質: 「教わる」タイプと同じ

- (50) a. 花子_iが太郎_jに自分_{i/j}の部屋で見つかった。
b. 太郎_iが先生_jに自分_{i/j}の部屋で捕まった。
- (51) a. *太郎がこっそり家に帰る途中、友達に3人見つかった。
b. *太郎が警官に3人捕まった。

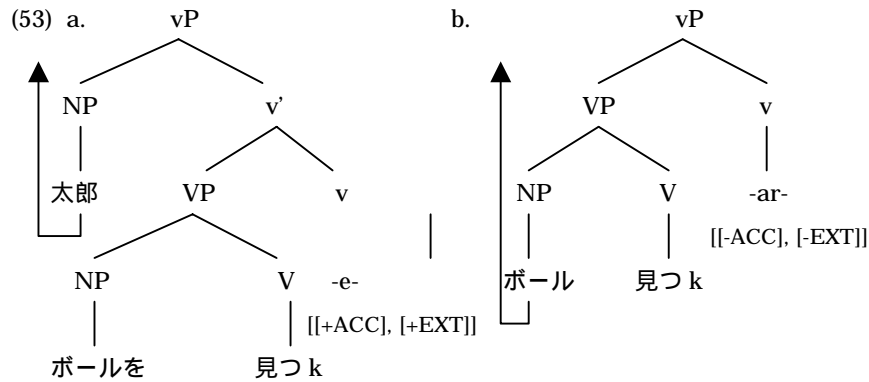
「見つかる」の興味深い性質

「見つかる」には(49b)で示したタイプ以外にももう一つのタイプがあると考えられる。

- (52) a. 健がボールを見つけた。
 b. ボールが見つかった。
 c. *ボールが健に見つかった。
 d. *ボールが草に埋もれているところを見つかった。

- ・自動詞文のガ格句(「ボールが」)は[被影響者]ではない。
- ・動作主二句が生起できない。
- ・ヲ格句が生起しない。

(52a, b)の構造



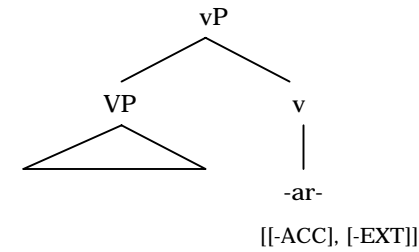
- ・自動詞型の-ar-: [-ACC], [-EXT]]が現われている。

すなわち、語幹「見つ k」は、自動詞型・他動詞型両方の-ar-と共起することができると考えられる。これは、本発表の 自動化辞-ar-は統語的に V から独立している、-ar-には自動詞型、他動詞型二つのタイプがある、という主張を支持するものである。

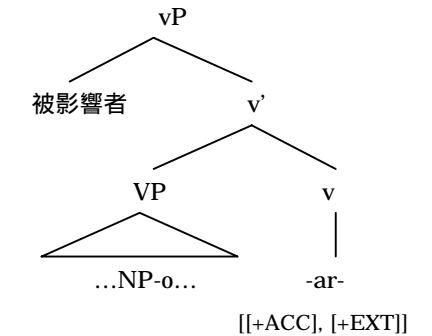
5. おわりに

まとめ

(54) a. 自動詞型の-ar-



b. 他動詞型の-ar-



-ar-という形態に関わる自他交替の複雑さはその統語的二面性に起因している。

語彙意味論的研究との関連

今泉(2001): HPSG の枠組みを用いて-ar-に関わる自他交替を分析。

「閉める」 / 「閉まる」 交替: 主事象指定型の自他交替

[VOL (3, [CAUSE ([VOL (3, [APPLY (3,4)]), [BECOME ([BE (4, CLOSED)]))])])]

[CAUSE ([APPLY (3,4)], [BECOME ([BE (4, CLOSED)]))])]

「見つける」 / 「見つかる」 交替: 関数交替型の自他交替

[VOL (3, [CAUSE ([VOL (3, [APPLY (3,5)]), [BECOME ([BE (4, FOUND)]))])])]

[AFFECTED (6, [BECOME ([BE (4, FOUND)]))])]

今泉(2001)は概念構造を用いて詳細な分析を行っており、-ar-が関わる自他交替現象の意味論的性質を明らかにしている。しかし、「ではなぜ-ar-という形態が関わる自他交替にこのような二つのタイプが存在するのか」という問いに対しては、答えていない。本発表の分析はその問いに統語論的観点から明示的な回答を与えることができる。

課題

本発表で取り扱った現象について

- ・動作主二句がなぜ生起できるのか。
- ・ヲ格句の随意性の問題。

“v”の特性と自他交替について

・vをヴォイスに関わる範疇として捉えるアプローチ(VoiceP(Kratzer(1996))など)との関連。様々なヴォイス交替現象をvに関連付けて捉える研究が多く of 言語について進められている。特に、Lidz(1999)では、vを語彙的な要素(reflexive)が占めているという分析が提案されている。そのような諸研究との対照を行うことによってさらに日本語におけるヴォイスについての知見が深まると考えられる。

・-ar-以外の接辞についての研究。接辞と意味論の関連に関しては影山(1996)以来研究が進んできたが、その統語的性質はあまり明らかになっていないと思われる。本稿で-ar-について示したように、他の接辞についても何らかの一般化が行える可能性はあるのではないか。

確かに自他交替は受動・使役といったいわゆる「統語的」と言われるヴォイス現象に比べて生産性が低く、個別的な側面が強い。しかし、本発表で示したようにその一部において統語論的に簡潔な説明・一般化が行える可能性は十分存在する。日本語内部の、あるいは他言語のヴォイス現象と対照させながら、意味・統語・形態的観点からの多角的な分析が必要であると言える。

【参考文献】

- Arad, Maya(1998) "Are Unaccusativity Aspectually Characterized?" *Papers from Upenn/MIT Roundtable on Argument Structure and Aspect. MITWPL 32*, Heidi Harley(ed.) pp.1-20
- Arad, Maya(1999) "On "Little v." *Papers on Morphology and Syntax, Cycle One. MIT Working Papers in Linguistics. 33*, pp.1-25
- Borer, Hagit(1994) "The projection of arguments" *Functional projections. University of Massachusetts Occasional Papers 17* pp.19-47
- Collins, Chris(1997) *Local economy*. MIT Press.
- Harley, Heidi(1995) *Subjects, Events and Licensing*. Ph.D.Dissertation, MIT.
- 長谷川信子(1999)『生成日本語学入門』大修館書店
- 長谷川信子(2002)「非動作主主語他動詞文の分析：Little vの素性について」『東西言語文化の類型論』特別プロジェクト研究報告書』 pp.801-816
- 今泉志奈子(2001)「動詞の意味構造における「被影響」の概念の役割について」『神戸女学院大学論集』47:3 pp.187-209 神戸女学院大学
- Imaizumi, Shinako(2001) "The role of AFFECTED in lexical causative alternation in Japanese." *Journal of Japanese Linguistics 17*, pp.1-28
- Jacobsen, Wesley M.(1992) *The transitive structure of events in Japanese*. Kuroshio
- 石田尊(2003)『日本語二格受動文の統語論的分析』筑波大学博士(言語学)学位請求論文
- 加賀信弘(2001)「意味役割と英語の構文」原口庄輔ほか編『語の意味と意味役割』pp.89-181 研究社
- 影山太郎(1996)『動詞意味論』くろしお出版
- 影山太郎(2000)「自他交代の意味的メカニズム」丸田忠雄・須賀一好編『日英語の自他の交替』pp.33-70 ひつじ書房
- 影山太郎(2001)「自動詞と他動詞の交替」影山太郎編『日英対照 動詞の意味と構文』pp.12-39 大修館書店
- 影山太郎(2002)「非対格構造の他動詞 意味と統語のインターフェイス」伊藤たかね編『文法理論：レキシコンと統語』pp.119-145 東京大学出版会
- 岸本秀樹(2002)「日本語の存在・所有文の文法関係について」伊藤たかね編『文法理論：レキシコ

ンと統語』 pp.147-171 東京大学出版会

Kitagawa, Chisato and Hideo Fujii(1999) "Transitivity alternation in Japanese." *Papers from the Upenn/MIT roundtable on the lexicon, MITWPL* 35, pp.87-115

Kuno, Susumu(1973) *The structure of the Japanese language*. MIT Press.

Levin, Beth and Malka Rappaport Hovav(1995) *Unaccusativity: At the Syntax-Lexical Semantics Interface*, MIT Press.

Lidz, Jeffrey (1999) "Causativity, Late insertion and the projection of vP." *Papers from the Upenn/MIT roundtable on the lexicon, MITWPL* 35, pp.117-136

松本曜(2000a) 『『教える / 教わる』などの他動詞 / 二重他動詞ペアの意味的性質』山田進・菊地康人・初山洋介編 『日本語 意味と文法の風景：国広哲弥教授古希記念論文集』 pp.79-95 ひつじ書房

松本曜(2000b) 「日本語における他動詞 / 二重他動詞ペアと日英語の使役交替」丸田忠雄・須賀一好編 『日英語の自他の交替』 pp.167-207 ひつじ書房

Matsuoka, Mikinari(2003) "Two types of ditransitive construction in Japanese." *Journal of East Asian Linguistics*. 12, pp.171-203.

Miyagawa, Shigeru(1989) *Syntax and Semantics 22: Structure and Case Marking in Japanese*. Academic Press.

中村捷(1996) 『束縛関係 代用表現と移動』 ひつじ書房

西垣内泰介・石居康男(2003) 『英語から日本語を見る』 研究社出版

西山國雄(2000) 「自他交替と形態論」丸田忠雄・須賀一好編 『日英語の自他の交替』 pp.145-165 ひつじ書房

奥津敬一郎(1967) 「自動化・他動化および両極化転形 自・他動詞の対応」 『国語学』 70 pp.45-66

柴谷方良(1978) 『日本語の分析』 大修館書店

杉本武(1991) 「二格をとる自動詞 準他動詞と受動詞」 仁田義雄編 『日本語のヴォイスと他動性』 pp.233-250 くろしお出版

Takano, Yuji(1998) "Object shift and scrambling." *Natural Language and Linguistic Theory* 16, pp.817-889

竹沢幸一(2000) 「アルの統語的二面性 be/have との比較に基づく日本語のいくつかの統語的解体

の試み」 『「東アジア言語文化の総合的研究」筑波大学学内プロジェクト(A)研究報告書』 pp.76-100 筑波大学文芸・言語学系